

ブロッコリー管理情報 No.1

令和6年6月
京築普及指導センター
JA福岡京築

ブロッコリー栽培のポイント

- ・計画的な作付けを行うため、早めにはほ場準備を行いましょう。
- ・作型に応じた栽培面積、品種選定、適期作業を行いましょう。
- ・微量要素資材を活用してホウ素欠乏を予防しましょう。

1. ほ場準備

- ・排水良好で日当たりの良いほ場を選び、定植2週間前までに土壤改良材を投入し、耕起する。特に根こぶ病発生ほ場においては、土壤分析を行い、酸性を矯正するため石灰資材の投入量を調整する。
- ・ほ場準備を遅らせないため、ほ場の周囲に溝を掘り表面排水に努める。
- ・ブロッコリーは深根性で過湿に弱いので、排水対策として、排水の悪いほ場では高畝にし排水溝を整備する。
- ・定植2～3日前までに、元肥（下記参考）を施用し、畝立てを行う。その際、苗の活着を良くするため、また除草剤の効果を高めるため、土塊が小さくなるよう細かく砕土し、畝立てする。
※土塊を小さくするには、適湿状態（土を握っても固まらない、長靴に土が付かない）でほ場を鋤く回数を増やす、ロータリー回転数を上げることが有効。
- ・畝立て時には、害虫予防のため、ダイアジノン粒剤5（4～6kg/10a、コガネムシ類幼虫）を全面土壤混和しましょう。

施肥体系(例)		
	資材名	施用量(kg/10a)
土改材	牛ふん堆肥	2000
	炭酸苦土石灰 (ミネGスーパー等石灰資材)	100
元肥	ほう素入り苦土硫加燐安250	100
	FTE	4
N-P-K 計(kg/10a)		12-15-10



【写真】コオロギによる芯葉の食害

※稲後に作付けする場合は、基肥を1～2割増しさせましょう

定植が遅れがちな方は、早めの畝立て(1ヶ月前)を検討しましょう!

2. 定植密度

畝幅	条間	株間	10a当たり	128穴トレイ(1.1倍)
140cm	60cm	35cm	4080株	35箱
	60cm	40cm	3570株	31箱
150cm	60cm	35cm	3810株	33箱
	60cm	40cm	3330株	29箱
160cm	60cm	35cm	3570株	31箱
	60cm	40cm	3130株	27箱

注) 移植機を使用する場合は、畝幅を車幅に合わせる。

培土に管理機を使用する場合は、条間を広める。

3. 定植

- ・JA共同育苗で、アオムシ等害虫の対策として、育苗時にミネクトデュオ粒剤を施用(40g/1トレイ)するので、定植前の殺虫剤のかん注は不要です。

※ただし、定植が大幅に遅れた場合は、ミネクトデュオ粒剤の効果が落ちている可能性があるため、別途、防除が必要になります。

- ・個人育苗の場合は、定植前日に、かん注処理できる薬剤をセルトレイにかん注しましょう(ハスモンヨトウ対策)。
- ・定植苗は本葉3~4枚の若苗とし、定植当日はセル苗を抜けやすくするために十分かん水しましょう。また、定植直後は、活着促進のためかん水をし、活着までに乾燥が続く場合は、畝間かん水を行いましょう。
- ・定植後のコオロギ類対策(【写真】参照)として、アクセルバイト(3~6kg/10a)を株元散布しましょう。

※アクセルバイトとダイアジノン粒剤5は使用方法が異なるため、予めご注意ください!

4. 追肥・中耕・土寄せ

- ・1回目の追肥は、定植15~20日後に条間に施用し、条間を中耕・土寄せする。
- ・2回目の追肥は、定植40~50日後に畝肩に施用し、畝溝を中耕・土寄せする。
- ・年内(11~12月)出しは、短期間で収穫するので初期生育を順調にさせ、早めの肥培管理が必要です。

※1回目の追肥を緩効性肥料に変えることで、2回目の追肥を省力することができます。

- ・厳寒期(1~3月)出しは、地温が十分に確保できる年内に茎葉を発達させて、株倒れ防止のため株元に十分土寄せを行いましょう。株太りが悪いとアントシアンが発現しやすいため、注意が必要です。

頂花蕾の出蕾期(頂花蕾がやっと確認できるくらい)に、3回目の追肥を畝肩に施用しましょう。※あくまで目安です。3回に制限せず、生育に応じて追肥を行いましょう。

※本管理情報の農薬情報は2024年6月24日時点の情報で確認(別紙含む)

ブロッコリー根こぶ病対策

根こぶ病対策のポイントは、「**土壌pH矯正**」「**排水の改善**」です。既に発生したほ場では、**薬剤による防除や耐病性品種等**と併せて予防しましょう。

(1) 土壌pHの矯正 (作付前)

根こぶ病は、**酸性土壌 (pH6以下)**で発病が多く、pH7.2以上では発病が抑制されます。過去の調査で、多くのほ場がpH6.0以下であることが判明しています。酸性土壌の改良のため、石灰資材を施用しましょう。

※石灰資材の施用量は、pH測定結果をもとに決定します。

土壌診断を希望される方はアグリセンターに土を持ち込んでください。

○土壌のpHが極端に低い場合は、以下の方法を検討しましょう。

【矯正方法】

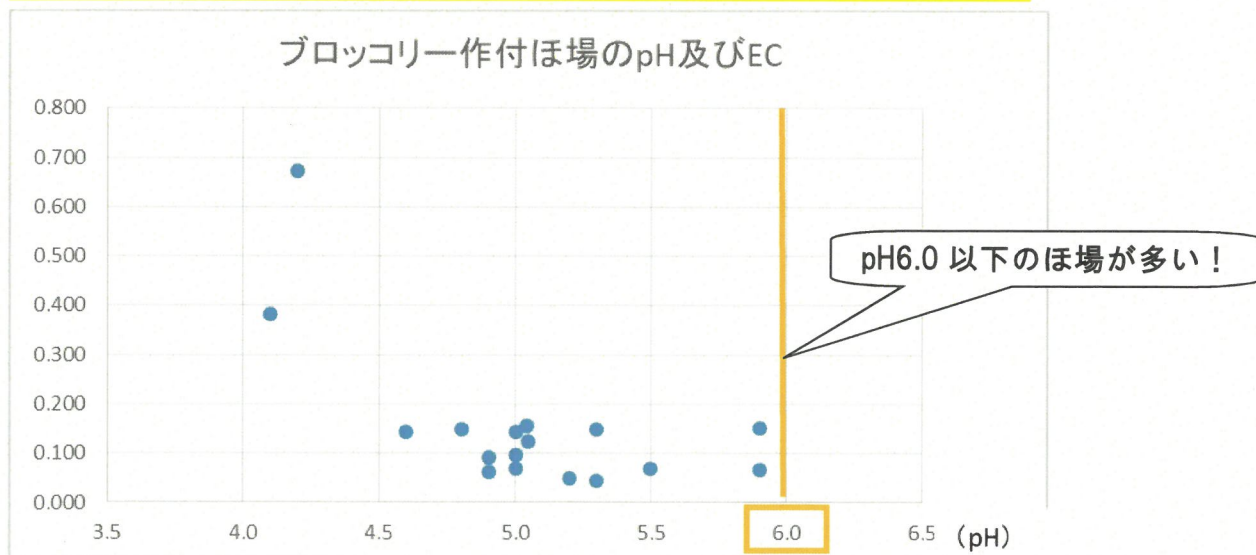
① 生石灰

土壌中の水分と反応して発熱します。作付の1ヶ月前には施用します。

② 転炉スラグ (ケイ鉄またはミネラルG)

微量元素欠乏が発生しにくい資材です。転炉スラグの施用量は10a当たり5t前後と多量ですが、土壌改良効果は10年程度持続します。※転炉スラグ利用検討時はACに相談してください。

※転炉スラグは効果の発現が遅いため、作付の3ヶ月以上前に施用します。



(2) 排水対策

根こぶ病菌は、水を介して広がります。排水不良のほ場への作付は控えましょう。

排水対策としては、サブソイラ等による耕盤破碎、溝切りによる表面排水促進等が効果的です。なお、排水対策を講じたほ場は乾きやすくなるので、灌水設備を整えておくことが大切です。

(3) 薬剤による防除

① オラクル粉剤

土壌に混和することで、ほ場の広範囲の作物を根こぶ病から守ります。

使用方法：定植前に全面土壌混和（30kg/10a）、または作条土壌混和（20kg/10a）し、深さ10～15cm程度をロータリ混和します。

※過湿な土壌では薬剤が充分混和されないので注意！

② オラクル顆粒水和剤

セル苗灌注は「作物の地上部の生育に必要な主根」を根こぶ病から守ります。そのため、少ない薬量・低コストで省力的に防除ができます。

使用方法：定植前に、200～500倍に希釈した薬剤を、セル成型育苗トレイ1箱当たり500mlずつジョウロ等で灌注します。

(4) 発病株の持ち出し（収穫終了後）

発病株の根部をほ場にすき込むと、根こぶ病菌の休眠胞子を土壌中に分散させることとなります。発病株は根ごと引き抜いて、ほ場外で処分しましょう。

(5) おとり作物の利用（4～5月）

おとり作物（葉ダイコン、エンバク等）を栽培すると、土壌中の菌密度を減少させることができます。おとり作物は播種後1～2ヶ月程度（おとり作物が土壌表面を覆うまで）栽培し、栽培後は土壌にすき込んだ後、1か月程度腐熟させます。

菌が増殖する恐れがあるので、鋤きこんだ後4週間は作付けを避けましょう。

各種除草剤の特徴と注意点

○フィールドスターP 乳剤

<特徴>

- ・ 土壌処理剤。散布によって形成された薬剤処理層が散布後に生えてくる雑草に効果を現すため、雑草発生前に散布すること。
- ・ ツユクサ、イヌホオズキ、イネ科雑草、カヤツリグサ、スベリヒユ、ヒユ類に優れた効果を発揮する。ただし、アカザ科、タデ科およびアブラナ科など一部広葉雑草には効果が劣る。

<注意点>

- ・ 散布後の多量の降雨は薬害の恐れがあるため、天候を見極めてから散布する。
- ・ 夏季の高温時は薬害を生じる恐れがあるので使用しない。

○アグロマックス水和剤

<特徴>

- ・ 土壌処理剤。散布によって形成された薬剤処理層が散布後に生えてくる雑草に効果を現すため、雑草発生前に散布すること。
- ・ イネ科から広葉まで幅広い雑草を防除。ただし、キク科、カヤツリグサ科には効果が劣る。

<注意点>

- ・ (薬剤の散布前) 碎土は細かく、整地は丁寧に行う(処理層が均一にできるようにするため)。
- ・ 極端な乾燥土壌または過湿土壌での使用は避ける。
- ・ 砂土や礫を含む土壌での使用は避ける。
- ・ 散布後に降雨が予想される時は使用を避ける。
- ・ 定植後散布の場合、他剤との同時施用や展着剤の使用は避ける。また、他剤も散布する場合は少なくとも前後一日の間隔をあける。
- ・ 保水性の高い水田転換畑や水稲後作の場合は 200g/10a の薬量で施用する。また、低温期の使用は避ける。
- ・ 薬液が霧状にならないような低い散布圧(10kgf/cm²)程度)で使用する。
- ・ 軟弱徒長苗、老化苗では使用しない。

○ラッソー乳剤

<特徴>

- ・ 土壌処理剤。散布によって形成された薬剤処理層が散布後に生えてくる雑草に効果を現すため、雑草発生前に散布すること。
- ・ 一年生雑草、特にイネ科雑草に高い効果を示す。ただし、タデ科、アカザ科などの広葉雑草には効果が劣る。

<注意点>

- ・ 有機物を多く含む土壌や粘質土では、効果が劣る場合があるので、登録の範囲内の高薬量で使用する事が望ましい。

○ナブ乳剤

<特徴>

- ・ イネ科植物に優れた除草作用を発揮する（スズメノカタビラを除く）。ただし、広葉雑草およびカヤツリグサ科には効果が期待できない。
- ・ 浸透移行性に優れ、根まで枯殺する。

<注意点>

- ・ 遅効的であり、イネ科雑草を完全に枯殺するまでに7～10日を要するので、誤ってまき直さないようにすること。
- ・ 低温期の使用は避ける

○バスタ液剤

<特徴>

- ・ 茎葉散布剤（薬液がかかった所だけを枯らす）の非選択性除草剤（雑草だけでなく作物も枯らす）であるため、作物にかからないよう注意。
- ・ 散布後2～5日で効果が発現し、7～14日後効果が完成。

<注意点>

- ・ 雑草が大きくなりすぎると効果が低下するので、草丈15～30cmを目安に散布。
- ・ 散布後6時間以内の降雨は効果を減ずることがあるため、天候に注意して散布。

☆R6年度除草体系（例）

定植後雑草発生前（全面土壌散布）	
フィールドスターP乳剤	収穫30日前まで
アグロマックス水和剤 ※散布後の降雨で 薬害の恐れあり	定植14日後まで
ラッソー乳剤	収穫60日前まで

定植2～3日後を目安に
散布し、生育初期の雑草
発生を防ぐ！



生育期間中	
定植15～20日後に条間を中耕、 定植40～50日後に畝溝を中耕 することで除草する。それでも雑草が多発する場合、 下記の農薬で除草する。	
<イネ科雑草のみが発生した場合> ナブ乳剤	雑草生育期イネ科雑草3～5葉期 ただし収穫7日前まで (雑草茎葉散布又は全面散布)
<イネ科雑草以外も発生した場合> バスタ液剤	収穫前日まで（畦間処理）

薬剤の種類	特徴	注意点！
茎葉散布剤 (バスタ液剤)	薬剤がかかった茎葉のみ枯らす	雑草が大きくなりすぎると効果が低下するので注意！ 夕方あるいは曇天日に散布するとより効果あり ※作物にかからないようにすること
全面土壌散布 (フィールドスターP乳剤、 アグロマックス水和剤、 トレファノサイド粒剤2.5)	雑草の幼根・幼芽に作用 (雑草の発芽を抑制)	必ず雑草の発生前に使用する（発生した本葉への効果 劣る） 散布液の重複散布や散布後の降雨により、薬害が発生 することもある